

## 解説「梅棹忠夫のモンゴル調査に関するローマ字カード」

著者	小長谷 有紀
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	122
ページ	1-6
発行年	2014-11-07
URL	<a href="http://doi.org/10.15021/00008945">http://doi.org/10.15021/00008945</a>

## 解説「梅棹忠夫のモンゴル調査に関するローマ字カード」

小長谷有紀

「妻と原稿を、ともかくも北京までおちのびさせて、わたくしは身軽になってよかったと思った。図囊1つである。そして、この大混乱を、1人のbystanderとして、平静に、理性的にながめることができるのを、科学者としてうれしく思った。

おれたちの、努力の結晶は、妻とともに北京へむかった。

あれが安全にとどきさえすれば、かならずや日の目をみることもあるだろう。それでよいのだ。

しかし、わたくしの原稿はまだ完成していない。あれだけではfragmentにすぎない。そのことが、いまさらくちおしく思えるのである。」(梅棹忠夫のモンゴル調査フィールドノート27番より。スキャン番号30-7および8)

のちの回想によれば(梅棹1997:59-60)、1945年8月20日、梅棹忠夫は、張家口の西北研究所にのこされていた調査記録類を妻の淳子にもたせて、貨車を見おくった。そして、自分自身は8月21日、無蓋貨車にのっておいかけた。奇しくもその列車は、張家口から脱出しようとする民間人をのせた、最後の列車となった。冒頭の記録は、その当時の思いをなまなましく伝えている。

このフィールドノートの記録には「原稿」とあるが、実際には、原稿のほかにも、さまざまな資料がもちかえられた。そのうちのスケッチ類については、すでに「SER」(Senri Ethnological Reports) 111号『梅棹忠夫のモンゴル調査スケッチ原画集』(小長谷・堀田2013)として刊行したとおりである。

本書は、梅棹忠夫のモンゴル調査資料のうち、フィールドノートを梅棹みずからがローマ字でカードに転記していたものを、このたび、小長谷が漢字かなまじり文に変換して入力しなおしたものである。カードはA6サイズで、およそ5,000枚である。

### 1 フィールドワークおよびフィールドノートについて

梅棹忠夫は、1944年5月に、張家口に設立されたばかりの西北研究所に赴任して以来、第二次世界大戦の終結まで、現在の中国内蒙古自治区(以下、内モンゴルと記す)における牧畜社会の研究に従事した。赴任して早々、1944年6~7月、当時の肅親王府の南牧場から北牧場までを移動し(以下、予備調査と称する)、モンゴル語と乗馬を身につけた。同年9月から翌1945年2月まで、東スニト旗を中心に現地調査をおこなった(以下、本調査と称する)。このときの調査隊の移動には牛車ももちいられ、梅棹自身はウマに乗り、冬期になるとラクダに乗りかえて、調査を遂行した。その後、1945年6月に太僕寺

(タイプ)に出向いた(以下、補足調査と称する)。

この時期のフィールドノートは、0番から48番まで、ローマ数字で番号がつけられている。ただし、31番と32番の2冊には、Katoとされるので、加藤泰安のノートであることはまちがいない。33番、34番、35番の3冊は実物がみあたらない。また、筆跡から推測して、36番から46番までの11冊は今西錦司の記したものであろうと思われる。したがって、梅棹自身のフィールドノートとしては、0番から30番までの31冊と、47番と48番、合計33冊がのこされていることになる。

このうち、22番は、梅棹みずからがインデックスのために整理したノートである。ここには、フィールドノートのリスト、調査行程表、聞き取りをした世帯の一覧(以下、調査対象リストと称す)などが整理されている。それによれば、0番は、1944年夏の予備調査の記録であり、1番から21番までが本調査の記録であることがわかる。そして、23番から30番までは補足調査のほか、張家口、天津、北京などに滞在していたあいだの記録である。

また、フィールドノートのうち、もっとも番号のおおきな47番と48番は、それぞれ1944年3月21日、2月23日という日付から記録がはじまっており、内モンゴルへおもむくまえに記されたものである。いわば研究構想の記録である。

## 2 ローマ字カードについて

ローマ字カードとは、梅棹がこれらのフィールドノートをもとに、記載情報を項目ごとに解体し、断片化して転記したものである。1946年5月に日本に帰国してから本格的な作業がおこなわれたと思われる。

加藤のノートの番号は登場しないので、加藤のノートはつかわれていない。一方、今西のノートからは、野生動物や気象、また僧侶のことなど限定的につかわれており、260枚のカードになっており、全体の約5%をしめている。したがって、カード化は、ほぼ自分のフィールドノートの転記とみてよいだろう。

このカード化にかかわらず、ローマ字で書くという作業は、当時の文化潮流の一つであり、梅棹忠夫にとっては、日本語の記載をめぐる議論の実践であった。梅棹自身の文章表現にとっても、大きな影響をあたえていた。梅棹自身は、「ローマ字によって、わたしの文章はきたえられたのである」と記している(梅棹1992:34-35)。このローマ字カードで例をのべよう。たとえば、フィールドノートでは、「家畜の増減」(フィールドノート21-50など)と書いてあるが、ローマ字カードでは「katiku no masiheri」となり、これをタイトルとしたカードは本書で明らかのように34枚ある。「zôgen」のように、漢字による熟語をそのままローマ字にしても、漢字には同音異義がおおいので、わかりにくい。漢字をもちない場合には、まぎれないことばをえらぶ必要がある。「ましへり」

という語は、辞書にはないが、聞けばだれでもわかる。このような単語えらびがほどこされていったのである。

しかし、本書はそのようなローマ字運動とその意味について検討するための資料ではない。それよりもむしろ、記された情報そのものをモンゴル研究の資料としてひろく活用するために、ローマ字を一般的表記に変換して公刊するものである。

ローマ字カード（以下、カードと称する）は、すべて下線付きでタイトルが付されている。まったくおなじタイトル、もしくはおなじようなタイトルのカードは、手製の小さな紙袋に入れてまとめられている。さらに、そのような小さな紙袋が複数まとめられており、仕切りカードがはさまれていた。仕切りカードには、おなじくローマ字でタイトルがしるされている（小長谷2014）。

各カードの最上段には、タイトルにつづいて、（ ）内のアラビア数字と、ローマ数字とアラビア数字、という3つの数字が記載されていた。（ ）内のアラビア数字は、聞き取り調査をおこなった世帯の番号である。22番のインデックス・ノートにおける、調査対象リストの番号にほかならない。また、ローマ数字は、フィールドノートの番号である。22番のノートのインデックスにおける、フィールドノートのリスト番号と対応する。また、最後のアラビア数字は、そのノートの該当ページをさす。

### 3 本書における編集作業について

上述したようにカード群は袋に入れること、および仕切りカードをもちいることという2つの方法によって2段階で分類されていたが、完成していたわけではなかった。とりあえず、現状のままでスキャン作業がおこなわれ、すべてのカードにスキャン番号があたえられた。

本書ではその番号を各カード内容の冒頭に記している。なお、袋からカードを取り出してスキャンするまえに、袋に入れたままの状態もスキャンしてあるため、テキストをもたないスキャン画像も存在する。また、書き損じのカードもスキャンしてある。本書におけるスキャン番号の抜けは、そうした区切りや書き損じなどである。

本書の編集にあたっては、以下のような方針をとった。

第一に、本書では、ほぼスキャン番号の昇順のままとした。スキャン作業は、カードの手前からおこなわれたのに対して、梅棹は、分類作業においてカードを手前にかさねていったようである。つまり、梅棹としてもともと意図していた順番は、現在のスキャン番号の降順に並べられていたと思われる。しかし、本書ではすべてを入れ替えて降順とはしていない。

第二に、小さな項目も立項した。梅棹自身は、仕切りカードにタイトルをつけていた

が、小袋のまとまりごとにはタイトルは付していなかった。カードごとにタイトルが付されているから、カードさえ見ればそのテーマは一目瞭然だからである。しかし、順列を入れ替えることができるように繰るために整備されたカードを、固定的な紙面に転換することになる本書では、立項されていたほうがわかりやすいので、簡単なタイトルを付した次第である。原則として、カード群で卓越している支配的なタイトルを選び、タイトルとしておいた。

第三に、一部のカードを移動させることによって、おなじ内容のカード項目がまとまるように配慮した。

第四に、項目の順列配置は、編者の責任でおこなった。梅棹のカード配列を復元する場合には、スキャン番号が元の位置データであるとみなせばよいだろう。

以上のような、配列に関する方針のほか、モンゴル語表記については以下のような方針をとった。

カードには、人名、地名、寺院名はもちろんのこと、おおくのモンゴル語による表記が散見される。このうち、人名の表記には若干のゆれがみられたため、フィールドノートの22番にある世帯調査リスト等にもとづいて統一し、本書ではカタカナ書きにあらためた。

地名および寺院名については、中国内蒙古大学のナランゲレル教授に全面的なご協力を得て、2013年10月に現地調査をおこなって確定し、これにもとづき調査行程に関する地図も刷新した。現地調査では、シリンホト市在住のヤラルト氏、スチンバートル氏、スニトの郷土史家D.チャガン氏のご教示を得た。心から深く感謝する次第である。なお、それらのモンゴル語をどのようにカタカナで表記するかについては、共同研究メンバーの呉人恵氏（富山大学教授）に批正をあおいだ。

また、植物名については、共同研究メンバーのナチンシヨンコル氏（当時、岡山大学研究員）が整理した。

カードに記載されたモンゴル語については、末尾にリストをかかげた。本文テキストではカタカナの斜体であらわし、初出時など適宜、その意味を [ ] 内にしめた。このような斜体化と [ ] は編者によるものである。ただし、家畜や世帯など、頻繁にもちいられているものについては、あらかじめ邦訳しておいた。リストにはその旨がしめされているので、どの単語がもとはモンゴル語で表記されていたかは明瞭である。モンゴル語リストにおけるモンゴル語のローマ字転写方法は小澤（1994）にしたがう。

一方、モンゴル語の表現に注目されて文章表現として記録されている場合には、梅棹によるローマ字表記の試みをそのまま記載しておいた。

カードの最上段に記されていた3つの数字すなわちインフォーマント、フィールドノート、その該当ページについては、いずれもアラビア数字で (10)2-40 というように並べた。10番のインフォーマントからの聞き取りで、2番のノートの40ページからの転記で

ある，という意味になる。インフォーマントについては調査対象リストにまとめてあり，末尾に掲げた。

本書では，インフォーマントとしてさらに (S) と (B) を補筆した。Sはサインエルブ，Bはバトーを指す。いずれも調査に同行した通訳であり，仮名にするための記号化ではなく，ラポールを築いた相手である。カードのテキスト本文中に頻繁に記号で登場していたものを，本書ではカード最上段にも併記しておく次第である。

編者による一部改変として，「môko (蒙古)」や「sinajin (支那人)」などの当時の表現を，現在の一般的な表現として「モンゴル」や「漢人」にあらためている。また，罫線をもちいた記載については，罫線だけを省略し，内容をのこすようあらためた。なお，スケッチのような絵画的表現は省略し，※印をつけた。さらに参考となる絵画的表現がある場合には [ ] 内に図譜の番号をつけておいたので，スケッチ原画集を参照されたい (小長谷・堀田編2013)。

漢字かなまじり文にするにあたって不明瞭な場合にはもとのフィールドノートにあたり，内容をたしかめたうえで入力した。それでもなお不分明な点については，[ ] 内に注記した。

このようなカードの記載は，まさしく断片的である。論文が未完成で「fragment (断片) にすぎない」という梅棹本人の形容にもまして，断片であるにとどまっている。しかし，断片的であるからこそ，多様な利用の可能性をひめている (小長谷2014)。

目次にしめしたように，40あまりの大項目のうち，梅棹自身が論文にしたのは，「乳と乳製品」や「乾草と飼料」など，ごくわずかである。その他のおおくの項目は，論文に利用されることのないままのこされた。いずれの項目も興味ぶかい。とりわけ，畜産物の集荷やそのみかえりとして提供される食料品その他の雑貨類に関する情報は，豊富である。たとえば，ホリシャとよばれる購買販売組合の導入は，重要な社会変革であったにもかかわらず，これまでほとんど研究されてこなかったがゆえに，本書は貴重な研究資料となるであろう。

このテーマにかぎらず，いずれのテーマであれ，現代社会を研究する際には，本書によって半世紀あまり前の状態と比較することができる。参照枠にすることができるほど，すぐれて実体的なデータがふくまれている。

梅棹たちは，およそ半年をかけて，全行程1,500キロメートルを踏査しており，サーベイ型であると同時に，いくつかの拠点ではステイ型でもある。調査行の速度を単純に平均すると1日10キロメートルほどである。このような，比較的ゆっくりしたスピードであったために，草原の植生や漢人商人の進出など，さまざまな環境条件が次第に変化するという遷移状況を把握できるような情報が確保されたのだった。当時の状態を緻密に復元するには不十分であるかもしれないが，その空間的遷移を把握しておくことによ

て、内モンゴル現代社会の構造的な理解がもたらされるであろう。

最後に、本書の作成にあたって、梅棹資料室の三原喜久子さんと明星恭子さんにはひとかたならぬお世話になったことを記して謝す。

## 引用文献

梅棹忠夫

1992 『梅棹忠夫著作集第18巻 日本語と文明』中央公論社。

1997 『行為と妄想——わたしの履歴書』日本経済新聞社。

小澤重男

1994 『現代モンゴル語辞典（改訂増補版）』大学書林。

小長谷有紀

2014 「梅棹忠夫のモンゴル調査の記録と整理——フィールドノートからローマ字カードへ」ヨ  
ーゼフ・クライナー編『日本とはなにか——日本民族学の20世紀』271-288頁所収、東  
京堂出版。

小長谷有紀・堀田あゆみ編

2013 『梅棹忠夫のモンゴル調査スケッチ原画集』（国立民族学博物館調査報告111）、大阪：国  
立民族学博物館。

## 注記

2014年6月11日、国立民族学博物館のホームページ上にある「民族学研究アーカイブズ」のコーナーにおいて、梅棹忠夫アーカイブズ資料に関する情報が一般公開された。資料目録として「全リスト」が掲げられており、資料の全体像を把握することができる。本書のもとになった、モンゴル調査に関する「ローマ字カード」については、デジタル画像としてそのまま画面上で閲覧することができる。また、さらに「ローマ字カード」のもとになったフィールドノートについても、「フィールド・ノート」資料番号19番から67番までに、デジタル画像として提供されている。

また、本書は刊行後、いずれ「みんなくりポジトリ」でデジタル版テキストとして公開される予定である。その公開により、以降は自由に文字検索が可能となるため、本書では索引を付していないことをご了承いただきたい。

本書、そのデジタル版テキスト、さらにデジタル画像等をぜひとも研究等にご活用いただくことを切に願う。刊行にあたっては労をいとわず整理につとめたが、いまなお誤記等があることを恐れる。読者のご批評を請う次第である。

なお、すでに刊行した『梅棹忠夫のモンゴル調査スケッチ原画集』のもとになったスケッチのデジタル画像も同アーカイブズにおいて公開されたので、併せてご利用いただきたい。